夜空のささやき

あやさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夜空のささやき

【Ｎコード】
Ｎ５６８６Ｅ

【作者名】
あやさ

【あらすじ】
この小説は、『七夕小説企画・星に願いを』参加作品です。主人公ふたりの恋物語は、『＆ノベル組』にて現在連載中です。（最近はイベント作品中心）こちらもよろしくお願いします。ｍ（＿＿）ｍ※また携帯での読み易さを考慮して、小まめに改行されております。あらかじめご了承下さい。――七夕の日、歩いて帰ることにした美月と彰。その日は朝からドタバタ騒ぎ。果たしてふたりは七夕に何を願うのか！？――

約束（前書き）

この小説は、『七夕小説企画・星に願いを』参加作品です。

約束

「明日は、星がキレイな夜になりそうですね」

部活が終わって、星の広がる空を見上げて何気なくつぶやいたあたしの一言に、

「じゃあ、明日は電車通学しようか？」

隣にいた彼、沢崎　彰　が、そう言った。

あたし達は、陸上部の先輩・後輩で、彼に一目惚れをしたあたしは、陸上部への入部を決意。

単純な理由で入部を決めても、いわゆる名門と言われているこの部についていくのは大変で、毎日自転車通学をして、足腰を鍛えているあたし。

（といっても、部員のほとんどが自転車通学しているから、差を縮めるのは難しいけれど。）

そのことを知った彼が、あたしに付き合って一緒に登下校してくれている。

だけど、あたし達は恋人同士ではない。

彼がどんな気持ちで、あたしに付き合ってくれているのか、本心はよくわからない。

「たまには、歩いて帰るのもいいんじゃない？」

あたしを見つめて、彼はニッコリと微笑んだ。
その笑顔にドキリとさせられて、彼の気持ちとか、どうでもよくなってしまう。
嬉しい。
それだけで、充分幸せだから。
ドキドキしながらも、平静を装って『はい』。
短く、そう答えた。
「じゃあ俺、美月ちゃん家まで迎えに行くよ？」
「え？」
あたしと彼の家までは、駅で数えると三つ分くらいは離れている。
「でも…」
と戸惑うあたしに、
「家から学校まで通うと思えば、美月ちゃんの家までは楽勝・楽勝」
と言って、その場で素早い足踏みをして見せた。
「プッ」
思わず吹き出してしまったあたしに、彼も照れ臭そうな笑顔になる。

「じゃあ、決定ね！」

「はい。お願いします」

ペコリと頭を下げて、明日の約束を交わす。

だけど…、ふと思う。

付き合ってるわけじゃない、この微妙な関係を思うと、少しばかり切なくもなる。

この関係がいつまでも続いて欲しい。
もっと進展したらいいのに…そう願いながらも、想いを伝えることで関係が壊れてしまうことを恐れている、あたし。

彼もあの笑顔の裏に、同じ気持ちを抱いてるのかな？

彼の背中を見つめて、心の中問い掛ける。

大きな背中。
たくましい身体。
長い手足。
柔らかな栗色の髪も。

全部。
大好きな、彼。

すごく近い場所にいるのに。

『スキ』

その一言は、遠すぎて。

なかなか言い出せない。

大騒ぎ

約束から一夜が明けて。
その日は朝から家中ドタバタ騒ぎ。

そわそわ何度も鏡を見ているあたしにつられてか、母も、妹の美夜までもが玄関を行ったり来たり、落ち着かない様子。

「あのね、彼氏とか、そんなんじゃないんだからね！」

しつこいくらい、念を押すあたしに、妹は、

「隠さなくてもいいって！
家まで迎えに来るんだもん。
彼氏じゃない方がおかしいよ」

全然、信じてくれない。

「あのねぇ…、美夜――」

本当に違うということを、もう一度説明しようと口を開くと、今度は母が、

「いいじゃないのよ。どっちだって。
美月が毎日一緒に男の子と学校行ってたなんて、お母さん全然知らなかったわ。
母親として、ちゃんと挨拶しなくちゃね」

と、髪型を気にしながら、なんだか嬉しそう。

『お母さん、変じゃない！？』
などと言いながら、妹とお互いに身なりのチェック。
お父さんは、もう会社に行ってしまった。
『美月も、そんな歳になったかあ…』
夕べ、彼が家に迎えにくることを話した後で、しみじみと、そう呟いた父だったけれど、それはどこか淋しそうにも見えた。
今朝も、背中に哀愁を漂わせて家を出た父は、いつもよりちょっぴり元気がなかった気がする。
父の姿をぼんやりと思い出して、悪いことをしているわけじゃないのに、何となく後ろめたい気分。
と、その時。
『ピンポーン』
チャイムが鳴った。
ハッ。と、顔を上げた。
「はあい」
パタパタと廊下を小走りに、母が玄関へ向かう。
その後を妹が、一足遅れてあたしが、玄関へと急いだ。
「おはようございます」

やや緊張気味の面持ちで、彼が扉の向こうから現れた。

「いつも美月が、お世話になっております」

母も丁寧なお辞儀をして、ふたりの挨拶は無事に交わされたみたい。

だけど、あたしの方は心臓バクバクで。

「おはようございます」

緊張でうまく声が出ない。

「美月ちゃん。おはよう」

いつもと変わらない、優しい笑顔の彼。

その笑顔に、あたしは更にドキドキしてしまう。

隣に立つ妹が、『カッコイイね。彼氏』と耳元で囁やくから、あたしはその一言で、全身に火がついたように熱くなるんだ。

『彼氏じゃないんだってっ！』

本人を目の前に、絶対に声には出せない気持ちを込めて、妹を睨む。

「お姉ちゃん、顔、真っ赤ぁー」

だけどその睨みも妹には効かなかったみたい。

逆に冷やかされて、あたしは慌てて両手で頬を隠した。

彼も、ちょっと困ったような、引き攣ったような、苦笑いを浮かべていた。

…もう、最悪。

泣きたい気分…。

願い

家を出て、ふたり並んで歩く。
歩き慣れたこの道も、隣に彼がいるだけで、違う場所にいるみたい。
なんだかくすぐったいような、変な気分。
「美月ちゃんの家って、みんな仲良しなんだね」
「そんなことないです。
妹とは、しょっちゅうケンカしてますよ」
…それに。
姉なのに、妹にからかわれるし。バカにもされるし。
「けど、そういうの、羨ましいよ。俺は」
「ええっ？　なんでですか！？」
「アニキとはあんまり話さないし。
妹とは歳が離れてるから、ケンカにもならないし。
美月ちゃん家みたいな、和気あいあい的な雰囲気が、俺ん家にはないんだよねぇ…」
そう言うと彼は、少し淋しそうな表情を浮かべた。
いつもは明るく、元気な彼の影の部分を見てしまった。
見てはいけないものを見た気がして、あたしは、かける言葉に悩ん

でしまう。

何か気の利いた一言でも、言えたらいいのに…。

「ごめんね。朝からこんな、暗い話」

「いえ。そんなことないです」

俯きがちに、答えてしまう。

「ほら。美月ちゃんも、そんな顔しないで！」

あたしの肩にポンっと手を置いて、彼は言う。

いつも陸上部の練習中に、そうやって励まされている。

多分、彼からの言葉にならないメッセージ。

『がんばろう！』

あたしの肩に彼の手が触れると、不思議と力が沸いて来て、本当にがんばれるんだよね。

「今度、家に遊びに来たらいいですよ。

家の妹でよければ、ケンカの相手くらいにはなれますから」

彼から貰った勇気で、あたしも何か励ましたくて出た言葉だった。

冷静になって考えると、彼を自分の家に誘うなんて、それこそ彼氏・彼女みたいじゃない。

そのことに気がついたあたしは、また顔を真っ赤にさせて、すぐに後悔。

だけど、彼は本当に嬉しそうに『ありがとう』と笑ってくれた。

その笑顔につられて、あたしも笑顔になってしまう。

…最悪…。

そう思えた一日が、彼の笑顔ひとつで最高の一日になる。

それが、『恋』の力なのかな？

あたしは、その日一日を、本当に最高の気分で過ごすことができた。

歩いて登校したあたし達のことは、ちょっとばかし話題にもなったみたいで、『付き合ってるの？』って、今日一日よく質問された。

本当は『そうだよ』って答えたいところだけど。

「違うよ。

そうなったらいいな…。

とは思ってるけど」

いまさら隠すことなんてない、自分の正直な気持ち。

7月7日。
彼との未来を、声に出して願ってみた。

星空

部活帰り、いつもは自転車で帰るところだけれど、今日は歩いて。

星空でも眺めながら、ゆっくり歩いて帰るのも気持ちいいだろうな…。

などと思っていたら、『俺達も一緒に帰るから』って、彼の同級生で、あたしにとっては部活の先輩でもあるカップルも急遽仲間入り。４人で帰ることとなった。

二人は最近付き合い始めたばかりだけれど、ずっと仲のいい友達だった二人の会話は、息の合った夫婦漫才のようで、そのやり取りを聞いているあたしは、笑いが止まらなくなるくらい、お腹を抱えて笑った。

彼と二人きりだと、こうはいかない。

普段からあまり会話のないあたし達だから、沈黙してしまうこともしばしば。

気まずい雰囲気だけは嫌だと思っていたから、４人で帰るのも悪くない。

楽しい時間はあっという間で、電車はまたたく間にあたしの住む駅へと着いてしまう。

「じゃあね！」

と手を振る二人に別れを告げて、あたし達は駅を後にした。
二人きりになると、急に別れが惜しくなる。

『もっと一緒にいたい…』

たくさんの星々に、願いをかけてみる。
七夕の今日なら、あたしの願いが彼に届く気がして。

「美月ちゃん。
ちょっと寄り道して帰りたいんだけど。
いいかな？」

案の定、あたしの願いを聞き届けたかのような彼の一言に、あたしは嬉しくなってしまう。

「はい。大丈夫です！」

寄り道。
とは言っても、辺りは暗闇に街灯の明かりだけ。
…どこに行くんだろう？
と思いながら、後をついていく。
彼は駅のすぐ近くにある小さな公園の中に入ると、ブランコに腰掛けた。

「美月ちゃんも座って？」

言われるままに、隣のブランコに腰を落とす。

子供の頃に戻った気分で、ユラユラしながら、天を見上げた。

そこには、無限にちりばめられた宝石が瞬いているかのような、星空が広がっていた。

宝石箱をひっくり返したかのようなその星空に、放り出されたかのような、吸い込まれるような気分で、全身で星を感じる。

「何年ぶりかなあ？

こんな風に誰かと星を一緒に見るなんて」

同じように空を見上げた彼の呟きに、

「あたしは、こうして星を見ることが久しぶりです」

ひとつひとつの星の輝きを目に焼き付けようと、見つめる瞳がその輝きで潤む。

会話は要らない。

そんな風に思えるくらいに、一瞬の煌めきに目を奪われる。

この星々の中、どこかで出会っているかもしれない織り姫と彦星に思いを馳せ、天の川を見つめた。

白く輝く星の川。

二人を隔てるこの川を越えて、一年に一度限りの逢瀬。

それはすごくロマンチックだけれど、逢えない日々を思うと切なくて、淋しい…。

潤んだ瞳に、星が溢れた。

会話

隣のブランコで同じように空を眺めている彼の横顔を、そっと見つめた。

無数の星の瞬きと、彼の瞳が目と目で会話をしているみたい。

「何の話しを、してるんですか？」

そう見えたから、自然と出た言葉だった。

「え？　そう見える？」

尋ねた彼の、驚いたような表情に、あたしは黙って頷いた。

「そうだね。確かに俺は、星と話してるのかもしれないな…」

呟くように、彼は話してくれた。

彼にとって七夕は、『特別な日』だった。

「俺の父さん、今日が命日なんだ。俺が小さい頃に交通事故で、亡くなったんだよ…」

そのことは、風の噂で聞いている。

今朝の会話に出て来た、歳の離れた妹は、お母さんの再婚相手との間に出来た子供で、彼とは異父兄妹だということも。

父親が、この世にいない。
そのことを説明しても理解できない歳だった彼に、母親は言う。
「父さんは、この空のお星様になったんだよ、って」
「……」
「だからかな？
毎年この日は、父さんに話しかけてしまうんだよ」
一年に一度だけ、自分に逢いに来てくれる気がするんだ…。
そう言った、彼の瞳は今にも泣き出しそうに見えて、あたしの胸はチクリと痛んだ。
「お父さんの星にはかなわないかもしれないですけど…。
あたしでよかったら、彰先輩の……」
『話し相手になりますよ』
そう続けようとして、言葉に詰まった。
それってちょっと、偉そうだよね！？
だけど、その後に続くいい言葉が思い浮かばなくて、俯いてしまう。
励ましたいのに、言葉が出て来ない。
しばし沈黙…。

ヤバイ。気まずい。
何か言わなくちゃ。
顔を上げると、彼と目が合った。
「…って、あたしじゃ、お父さんの代わりはできないですよね！？」
変なことを言ってしまった。
照れ隠しに、笑ってごまかしてみせたけれど、彼は真剣そのものの
瞳で、あたしを見つめている。
「えっと…」
何か言わなくちゃ。
焦るあたしに、彼は言う。
「うれしいよ。
美月ちゃんには色々と、話したいことがあったから」
『聞いてくれる？』
そう彼が尋ねるから。
「はい。喜んで」
あたしも笑顔で、そう答えた。
と、彼は立ち上がると、今度は近くのベンチに座って、
「美月ちゃんも座って」

と言う。

ブランコよりも、近い距離にドキドキしてしまう。

遠慮がちに、少し離れた場所に座ると、

「警戒しなくても大丈夫だよ。

美月ちゃんのこと、襲ったりしないから」

笑いながら言う彼の言葉に、

「…そんなコト、思ってませんよ！！」

本気で反応してしまう、あたし。

「じゃあ、もっと側に来て？」

冗談か本気か分からない彼の言葉に、顔が熱くなる。

優しく促されて、あたしは彼の近くに座り直した。

彼の吐息を感じる距離に。

夜空のささやき

「俺、卒業したら、県外の専門学校に行くことにしたんだ」

「え！？」

そうなの？
全然、知らなかった…。

「家に居づらいっていうのもあるし、なりたい職業もあるし」

「…そう、なんですか…。
寂しくなりますね」

明らかに落胆したかのような自分の態度に、慌てて、

「でも、夢が叶うように応援してますから！」

わざと明るく振る舞った。

そんなあたしを優しく見つめていた彼も、暗い表情になると、

「けど…。
美月ちゃんと離れるのは、俺も正直、嫌なんだよね…」

ぽつり。
そう、呟いた。

「……」

「だけど、いつか離れて行く俺が、そんなこと言うなんて…勝手だよな。
ごめん。美月ちゃん。忘れて」

「いえ。
うれしいです。
うれし過ぎて、涙出そうです」

言いながら、本当に涙目になる。
今最高に、幸せな気分。

「ちょっ…」

「あたしもずっと、彰先輩と一緒にいたいな…って、思ってましたから」

すべてはあの日。
彼に一目惚れをしたあの瞬間から、彼の隣をずっと夢見ていた。
夢が叶うことを、心の中で願っていた。

「卒業しても、県外に行っても、ずっと俺の側にいてくれる？」

確認するような、彼の問い掛けに、

「もちろんです。
あたし、彰先輩の『北極星』になりますよ！」

自信満々で答えた。

「北極星！？」

無限の宇宙（そら）の星の中で、たった一つだけ。

毎日同じ場所にいて、変わらずに。そこに在る星。

『北極星』のように、あたしも一途に彼を見つめていたい。

「じゃあ俺が、美月ちゃんの『北極星』になるよ」

うん。って頷くと、フワッと、彼の両腕があたしの身体を抱きしめた。

緊張で、身体が固まってしまう。

思わず目を閉じた。

「ずっと、こうしたかった。

ずっと、言いたかった…」

耳元で、彼がささやく。

「美月ちゃんのことが、好きなんだ。俺と、付き合って欲しい――」

夢にまで見た、彼からの告白。

本当に夢見たいで、信じられない。

だけど目を開けると、そこには同じように緊張した面持ちの、彼の顔があった。

「はい」

その真剣な眼差しが、ウソではないことを物語っている。

「あたしも、彰先輩のことが、大好きです！」

二人の気持ちが、今。
ここで、ひとつになった。

「マジでうれしいよ。
美月ちゃん」

彼の肩の向こう。
重なるふたつの影を見守っていた、幾つもの星の瞬き。

『おめでとう』

そう囁いたように聞こえたのは、お父さんの星からの、祝福の声だったのかもしれない。

7月7日。
それは、忘れられない。
『記念日』

――END――

夜空のささやき（後書き）

最後まで読んでくれたみなさん、本当にありがとうございます。
七夕企画参加作品、どうにか完結です。　星空の情景。執筆した日は厚い雲に覆われて星一つ見えず、うまく描くことができませんでした。　もっとロマンチックに、もっと感動的に、を目指していたのですが。　設定に関しても無理矢理な印象を受けるかもしれませんが、既に&ノベル組にて連載中のキャラクター達なので、設定変更できなかった旨をご了承下さい。　それでは本当にありがとうございました。m（__）m

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5686e/

夜空のささやき

2010年10月9日04時27分発行